

平成 20 年 3 月 18 日

## 品川区立小学校児童の社会的言動に関する研究報告

日本こどものための委員会 宮崎 昭

### 1、目的

子どもたちの、社会的行動について、ソーシャルスキルトレーニングのプログラムである「セカンドステップ」の実施校における児童の変化を客観的に測定し、これを非実施校と比較することで、その教育成果を科学的に検証するものである。

### 2、方法

(ア) 対象：品川区内の小学校 6 校の 1 年生（各校 1 学級の児童を対象とする）

セカンドステップの実施校 3 校、非実施校 3 校を対象とする。

(イ) 期間：3 回、2006 年 9 月、2007 年 3 月、2008 年 2 月の時期に実施する。

(ウ) 手続き

① 測定方法：各時期に、次のふたつの手続きを行い、子どもたちの変化を測定する。

1. 教師による社会的行動の評価：各時期に、子どものひとりひとりの社会的行動を観察して、資料 1 の SSBS（の質問紙に記入する。

2. 外部研究協力員による観察：資料 2 の要領にて、各時期に 1 日で実施する。

(ア) 課題場面の観察：研究協力者が設定した別室での「ゲームとおやつ」課題（資料 2）に参加してもらい、そこでの社会的行動をビデオ録画する。

(イ) 休み時間の観察：学校での休み時間に子どもたちの攻撃的行動を観察して、資料 3 のチェックリストに記録する。

注：外部研究協力員には、研究実施前に「ゲームとおやつ」課題の実施方法について半日かけてトレーニングを実施するとともに、攻撃的行動のチェックリストの使い方についてガイダンスを行う。また、実施後に、測定データの整理と取りまとめ、測定実施上の問題点の整理のために半日の事後ミーティングを実施した。なお、研究協力員には、どの小学校が実験校であり、どの小学校が非実施校であるのか伝えない。

② セカンドステップの実施

「セカンドステップ」プログラムは、米国ワシントン州にある NPO 法人：Committee for Children (1978 年設立)によって開発された。この法人は、「教育関係者、家族及び地域社会のために、良質な教育プログラムを作成して、こどもたちが安全で安心した毎日を送り、社会的に発展するよう援助すること」を目的に活動している。このプログラムでは、こどもが健全な対人関係を育み、さまざまな場面で問題解決力を養っていけるようレッスンが計画されており、これを指導するおとなが、こどもにとって生きた良いモデルになっていくことが大きな目標となっている。また、全

米百数十の防止教育プログラムの中から、「もっとも効果的なプログラム」として米国教育省（日本では文部科学省にあたる）より表彰を受けた。日本の「セカンドステップ・コース1（4－8歳向け）」のレッスン内容とねらいは、次のとおりである。

第1章 相互の理解：「自分の気持ちを表現し、相手の気持ちに共感して、お互いに理解し合い、思いやりのある関係をつくること。」

第2章 問題の解決：「困難な状況に前向きに取り組み、問題を解決する力を養って、円滑な関係をつくること。」

第3章 怒りの扱い：「怒りの感情を自覚し、自分でコントロールする力を養い、建設的に解決する関係をつくること。」

#### 1. 担当教員の研修

(ア) 実験校の小学校1学年担任が、平成18年8月に日本こどものための委員会が定める2日間にわたる所定の研修（資料4）を受講したうえで、セカンドステップを実施する。

(イ) 平成19年4月に担任が異動となった学校については、新たな担任が平成19年8月に日本こどものための委員会が定める2日間にわたる所定の研修を受講したうえで、セカンドステップを引き継いで実施する。

#### 2. 実施計画

(ア) 小学校1年9月より小学校2年3月の期間に、資料5のレッスン進行表を参考にして、各小学校の学級ごとに実施計画を作成して、セカンドステップコースIの28レッスンを実施する。

### 3. 倫理面での配慮

(ア) 対象とする児童：対象とする児童は、学校識別記号（A校、B校、C校、D校、E校、F校）と出席番号あるいはそれに代わる番号により、個人識別記号A2006-01（A校2006年度の出席番号1番の児童）と表示し、個人名等は識別に使わない。各学校においては個人識別番号と個人名との対応が分かるようにしておく。

(イ) 研究対象から除外する児童生徒：発達障害や虐待などの特別な個人的事情が明確な児童は結果の処理から除外する。また、保護者から研究協力の承諾が得られない児童については、同じように活動に参加した場合にも、教師によるSSBSの評価を行わず、課題場面の順番を最後にしてビデオ録画をとらない。

(ウ) 研究対象から除外する児童については、学級担任の申請に基づいて学校長の判断の元に決定し、その個人情報には研究者に知らせない。除外対象となる児童の個人識別記号だけを研究担当者に知らせる。

(エ) 研究発表：研究報告書を品川区教育委員会に提出すると共に、学術会議等における発表を行い、得られた結果を社会に還元する。

#### 4、各小学校における外部研究協力者による観察の進め方

##### (ア) 事前の打ち合わせ (教育委員会と学校長)

- ① 外部研究協力者の訪問日の決定、ならびに;外部研究協力者名 (4名) を確定する。
- ② 小学校と外部研究協力者の連絡担当者を確認する。
- ③ 朝の集合時間と場所を決め、外部研究協力者の連絡担当者に連絡する。

##### (イ) 事前の各学校での準備 (学校長と担任)

- ① 保護者と児童への説明と承諾を得る。
- ② 研究対象から除外する児童と、対象となる児童の個人識別記号を決定する。
- ③ 「ゲームとおやつ」課題のための別室の準備とその時間の設定、観察時間 (休み時間10分×6回分程度) の設定を行う。
- ④ 「ゲームとおやつ」のチームを同性4名で1チームに分けて順番を決める (担任)。研究対象から除外する児童ならびに保護者から承諾がえられなかった児童を、同性にならないチームに配置し、順番の最後に持ってきてビデオ録画等を行わない。
- ⑤ 外部研究協力者4名が分担して観察する「休み時間の観察」対象者の顔 (名前) と個人識別記号の対応表を用意する。(学部研究協力者1人で、10分の休み時間に児童1人を観察する。それを5回繰り返して小計5名の児童を観察する。4人の外部研究協力者がいるので総計20名の観察を行う。その対象は、研究対象児童からランダムに選ぶ。)

##### (ウ) 研究協力者の事前準備 (研究協力者のうち連絡担当者が責任を持つ)

- ① 各小学校の連絡担当者と連絡を取り、訪問日と訪問時間、対照となる児童人数と個人識別記号、「ゲームとおやつ」課題の実施時間、観察のための休み時間を確認する。
- ② ビデオ録画機器、録画消耗品、記録用紙の準備と確認を行う。
- ③ 「ゲームとおやつ」課題のための必要物品の準備を行う。
- ④ 休み時間の観察の対象児童の割り振りをしておくこと。

##### (エ) 当日の打ち合わせ (外部研究協力者と各小学校の担当責任者)

- ① 朝の指定された時間に小学校を訪問して、当日打ち合わせを行う。

##### (オ) 当日、外部研究協力者を学級で紹介 (担任と外部研究協力者)

- ① 研究の目的と今日の日程の中で、どんなことをするか説明する。
- ② 「ゲームとおやつ」課題の実施手順; 1チーム4名のチーム分けと順番の確認。

##### (カ) 外部研究協力員による観察

- ① 「ゲームとおやつ」課題の実施; 1チーム10~15分で、並行して2チームで実施  
担任には、参加チームの順番整理と待機児童の学級での指導をお願いする。
- ② 「攻撃的行動の観察»; 4人が、休み時間等に対象となる児童を観察する。

##### (キ) 観察の終了 (外部研究協力者と各小学校の担当責任者)

- ① 観察が終了したら、機材を撤収し、記録を取りまとめた上で、小学校の担当者と学校長に「終了」したことを伝えて終わる。

## 5、結果と考察

### (ア) 教師による社会的行動の評価

セカンドステップ実施小学校（実験群）3校、ならびに非実施小学校（統制群）3校対象となった小学校1年生（2007年度は小学校2年生）から、20名を無作為に選んで、SSBS（学校における社会的行動評価表）を担任が2006年9月、2007年3月、2008年2月の3回、記入した。各調査における評価人数は以下の通りである。

表1 SSBS 評定人数

人数	2006Sep	2007Mar	2008Feb
統制群	60.00	59	60
実験群	65.00	63	59

#### ① 社会的行動得点平均の変化

社会的な行動項目は32項目あり、これを5件法で評定するものである。そのため、社会的適行動得点は32点から160点の範囲をとる。本研究における実験群と統制群の児童の社会的得点の平均は次の図1のとおりであった。

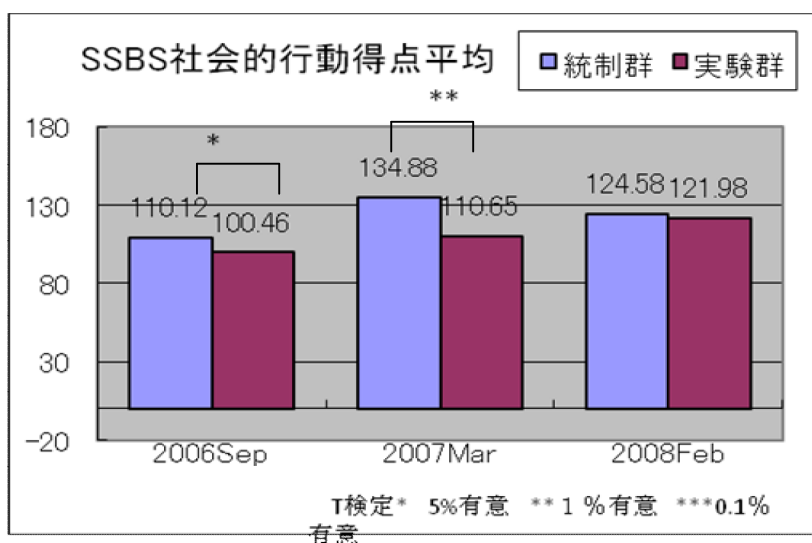


図1 SSBS の社会的行動得点の平均の推移

この結果をみると、セカンドステップ開始時には、非実施校の統制群の方が社会的行動得点が高く、半年後においてもその傾向が統計的にも1%水準有意な程度に強く認められる。しかし、セカンドステップ実施後の2008年2月は、実験群も統制群と変わらない程度に社会的行動得点が上がっている。むしろ、統制群の平均値が若干下がっている。

#### ② 反社会的尺度の変化

反社会的な行動項目も32項目あり、これを5件法で評定するものである。そのため、社会的適行動得点は32点から160点の範囲をとる。本研究における実験群と統制群の児童の反社会的得点の平均は次の図2のとおりであった。

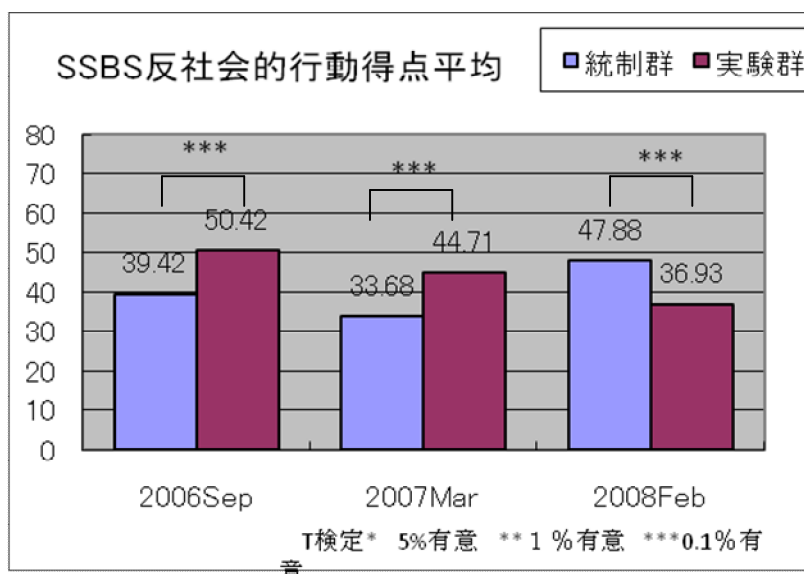


図2 SSBSの反社会的行動得点の平均の推移

この結果をみると、セカンドステップ開始時には、実施校の実験群の方が反社会的行動得点が高く、半年後においてもその傾向が統計的にも0.1%水準と明らかに有強いことが認められる。一方、セカンドステップ実施後の2008年2月では、統制群の反社会的行動得点の平均が高くなり、実験群は有意に低くなっている。すなわち、実験群ではセカンドステップの実施を通じて、反社会的行動得点が有意に低下したが、非実施の統制群では逆に反社会的行動得点が高くなっていることが分かる。

(イ) 外部研究協力員による「ゲームとおやつ」課題の観察

① ゲームの目標を協力的目標にしたか、競争的目標にしたか

「ゲーム」は、自分のチームが勝ってたくさんのおやつをもらう競争的目標を選ぶか、両方のチームの合計得点を高くしてジュースをもらう協力的目標にするか、選ばせた。その人数は図3のとおりである。

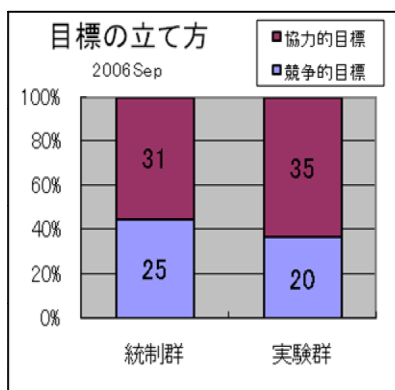


図3-1 ゲーム目標 (2006Sep)

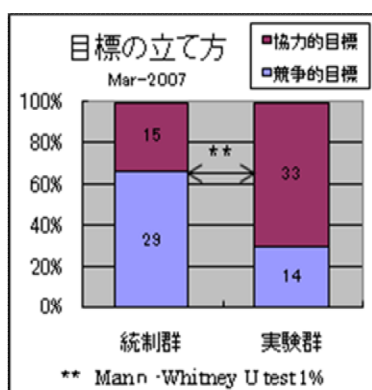


図3-2 ゲーム目標 (2007Mar)

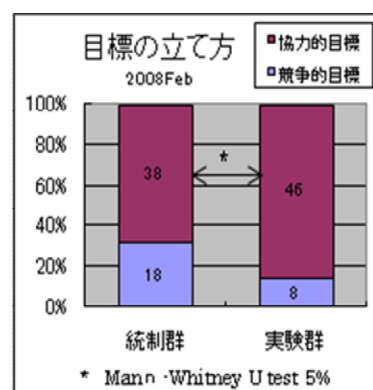


図3-3 ゲーム目標 (2008Feb)

セカンドステップ実施前の 2006Sep の時点では、実験群も統制群もほぼ 40%の児童が、自分たちのチームが勝つて多いおやつをもらう競争的な目標を選んでいる。しかし、セカンドステップを初めて半年後の 2007Mar の時点では、統制群では競争的な目標を立てる児童が増えているのに対して、セカンドステップを受けた児童では協力的な目標を立てる児童がいくらか増えて、両者の間に統計的に 1%水準で有意な差が認められた。さらに、翌年の小学校 2 年が終わる 2008Feb の時になると、統制群でも実験群でも協力的な目標を立てる児童が増えている。それでも、両者の間には統計的に 5%水準で有意な差が認められている。

この結果は、セカンドステップを実施した学級では、協力的な目標を選ぶ児童が一貫して増加していることを示している。一方、未実施の学級では競争的な目標を選ぶ児童が増えた後に、協力的な目標を選ぶ児童が増えていることがわかる。

② ゲームでの両チーム合わせた合計得点の推移

実験で行ったゲームでは、協力的な進め方をすれば両チーム合わせた合計得点が高くなり、全員にジュースをもらえる可能性が高まる。一方、競争的な進め方をすれば、自分のチームは勝つかもわからないが両チーム合わせた合計得点は低くなって、ジュースをもらえる可能性が低くなる。こうした特徴をもつ合計得点の推移は、児童がゲームの中で協力的にふるまったのか、競争的にふるまったのかを示している。その結果が図 4 に示されている。

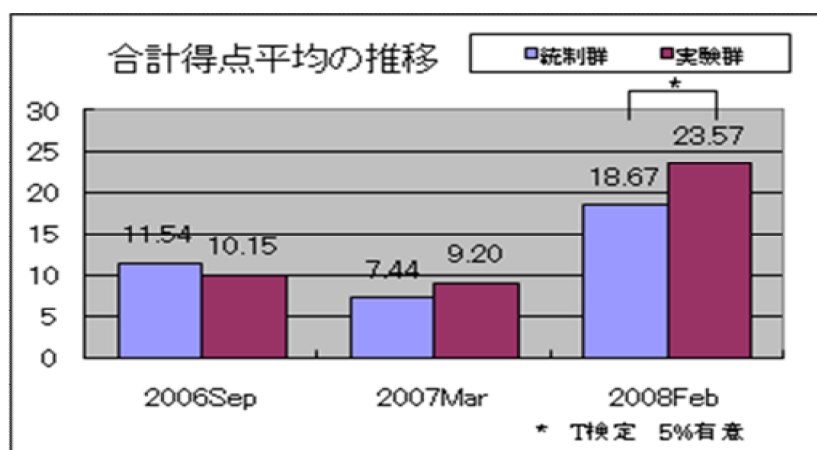


図 4 両チームの合計得点平均の推移

この結果は、2006Sep の時点では統制群の合計得点の平均が若干高いが、実験群との間に有意な差は認められなかった。半年後の 2007Mar の時点では実験群の合計得点の平均の方が高くなっているが、これも統制群との間に有意な差は認められなかった。そして、1 年半後の 2008Feb の時点では、統制群も実験群も合計得点の平均が高くなっているが、T 検定を行うと実験群の方が 5%水準で有意に高い平均得点となっている。すなわち、セカンドステップを実施した学級の児童の方が、協力的なゲームの進め方をしてより高い合計得点を取っている。

③ ゲームで協力して飲み物を獲得したか

ゲームで全員が飲み物をもらうには、両チームの合計得点で28点以上をとる必要がある。したがって、飲み物を獲得したかどうかという結果は、両チームの合計得点の平均の結果と同様に、児童がゲームの中で協力的にふるまったのか、競争的にふるまったのかを示している。その結果が、図5である。

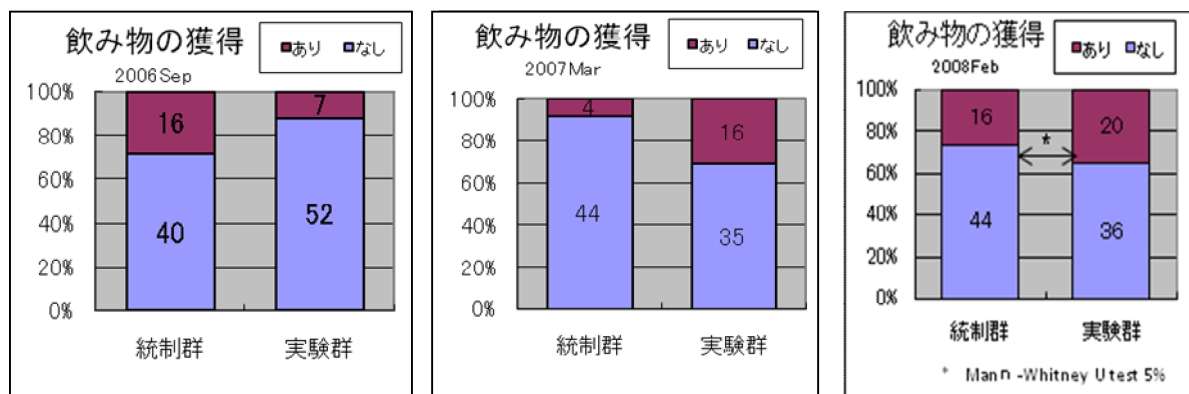


図5-1 飲み物獲得 (2006Sep) 図5-2 飲み物獲得 (2007Mar) 図5-3 飲み物獲得 (2008Feb)

最初の2006Sepの時点では、統計的に有意ではないものの、統制群の方が協力的なゲームの進め方をして飲み物を得た児童が多かった。半年後の2007Marの時点では、統制群は協力的にゲームを進めて飲み物を得た児童が減り、逆にセカンドステップを実施した学級の児童では、協力して飲み物を得た児童が増えている。しかし、両群に統計的な有意差は認められなかった。1年半後の2008Febの時点になると、統制群も実験群も協力して飲み物を得た児童が増えているが、実験群の方が5%水準で有意に多くの児童が協力して飲み物を得ている。

これはゲームの目標の選択と同じ結果であり、セカンドステップを実施した学級では、協力して飲み物を得た児童が一貫して増加していることを示している。一方、未実施の学級では競争的なゲームの進め方をして飲み物をもらえない児童が増えた後に、協力的に飲み物を得た児童が増えたことがわかる。

④ おやつ分け方

ゲームで勝ったチームには多いおやつ、負けたチームには少ないおやつが与えられるが、実際に配る時には「それぞれのチームで分けてもいいし、みんなで分けてもいいよ」と説明する。そこで、子どもたちがどのように交渉しておやつを分けるかは、対人関係の一つの側面を表していると考えられる。本研究では、各チームごとに分けたのか、一部を交換するなどの交渉をしたのか、全部をみんなで分けたのかをVTRで分析して評価し集計した。

各チーム毎に分けるのは、ゲームの勝敗の結果として勝敗を優先した分け方と考えられる。また、一部に分けるのは、交渉する態度であり、対人関係の広がりを見せずと考えられる。全部をみんなで分けるのは、勝敗よりも一緒にゲームを楽しんだ

ことを優先する体験共有的な分け方と考えられる。その結果は図6に示す。

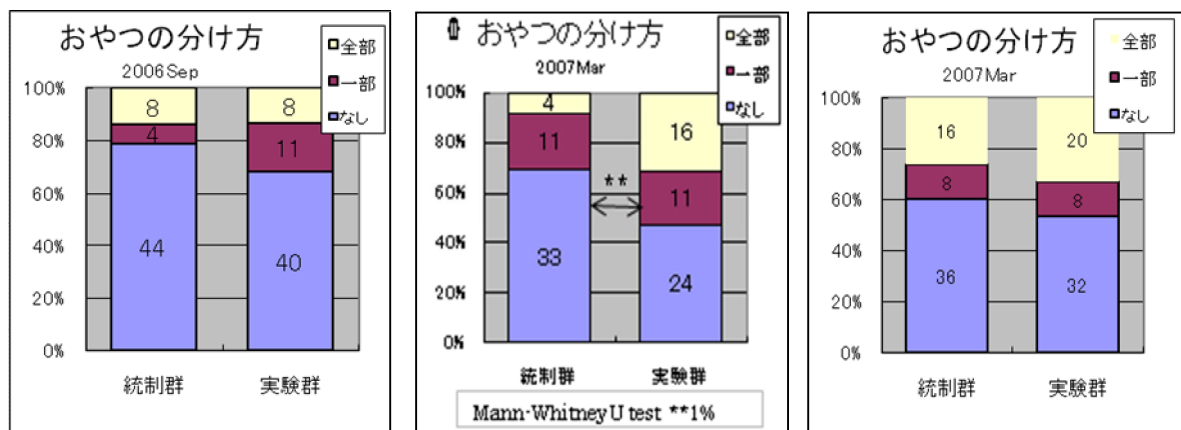


図 6-1 おやつ分け方：2006Sep 図 6-2 おやつ分け方：2007Mar 図 6-3 おやつ分け方：2008Feb

最初の2006Sepの時点では、実験群も統制群も70～80%の児童が勝敗優先の分け方をしている。半年後の2007Marになると、統制群では、一部交換する児童は増えているが、全部をみんなで分ける児童は減少し、セカンドステップを実施した学級の児童では、全部をみんなで分ける体験共有的な分け方をする児童が統計的に1%水準で有意で増えている。

#### (ウ) 攻撃的行動の観察

セカンドステップ実施小学校（実験群）3校、ならびに非実施小学校（統制群）3校対象となった小学校1年生（2007年度は小学校2年生）から、20名を無作為に選んで、CBCL（子供の問題行動チェックリスト）の中から、「攻撃的行動」の項目をチェックリストにして、外部の研究協力者が2006年9月、2007年3月、2008年2月の3回、一人当たり10分の観察時間を設けて、休み時間や給食の時間などを観察してチェックした。各調査における有効評価人数は以下の通りである。

表2 攻撃的行動チェックリスト評定人数

人数	2006Sep	2007Mar	2008Feb
統制群	60	59	59
実験群	60	58	59

#### ① 攻撃的行動の観察得点平均の推移

攻撃的行動のチェックリスト項目は23項目あり、これを3件法で評定するものである。そのため、攻撃的行動得点は0点から46点の範囲をとる。本研究における実験群と統制群の児童の攻撃的行動の観察得点平均は次の図7のとおりであった。

この結果をみると、セカンドステップ開始時には、セカンドステップ実施校の実験群の方が攻撃的行動の観察得点平均が高く、半年後においてもその傾向が統計的



にも5%水準有意な程度に認められる。しかし、セカンドステップ実施後の2008年2月では、実験群も統制群と変わらない程度に攻撃的行動の観察得点平均が下がっている。むしろ、統制群の平均値の方が若干上がっている。

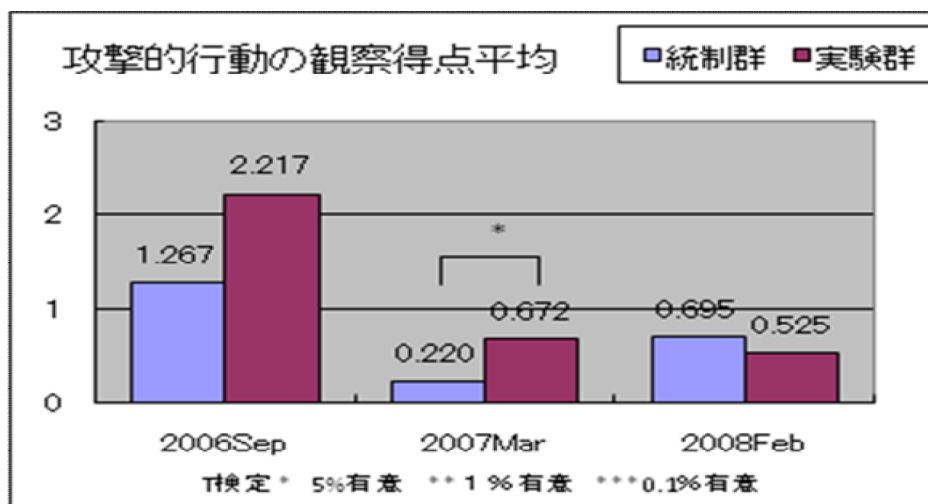


図7 攻撃的行動得点の平均の推移

実験群では最初から攻撃的行動が観察されていたが、次第に減少する方向に一貫して変化している。一方、統制群は最初から攻撃的行動の観察されることが少なかったが、2008Febに時点になって、若干増加している。

## 6、まとめ

セカンドステップの実施校を実験群、非実施校を統制群として、社会的行動の変化を客観的に測定した。その結果、次のような点から社会性の成長と反社会的行動の改善が認められた。

当初、社会的行動では、教師によるSSBSの社会的行動の評価結果やゲームとおやつ課題での合計得点の平均の推移と飲み物の獲得人数などからわかるように、実験群よりも統制群の方が高かった。また、反社会的行動では、教師によるSSBSの反社会的行動の評価結果や攻撃的行動の観察得点平均の推移からわかるように、統制群よりも実験群の方が高かった。

ところが、セカンドステップを実施して半年後には、実験群で、ゲームで協力的な目標の立て方をする児童が増えたり、ゲームで協力して飲み物を獲得する児童が増える、おやつ全部をみんなで分ける児童が増えるなどの社会性の進歩をうかがわせる変化が見られている。一方、統制群では、ゲームとおやつ課題でより競争的になるなどの逆の変化が見られている。

そして、セカンドステップを実施して1年半の後には、SSBSの社会的行動では実験群も統制群も同じ程度の成績を示し、ゲームとおやつ課題では実験群の方が統制群よりも高い社会的行動を示している。また、反社会的行動の変化では、SSBS反社会的行動得点平均や攻撃的行動の観察得点平均の推移にみられるように、実験群が明確な改善を示しているのに反して、統制群は逆に悪化している面が示されている。

## 文献

- 井澗 知美・上林 靖子・中田 洋二郎・他 (2001) Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発. 小児の精神と神経. 41(4) (通号 152). 243~252. 日本小児精神神経学会 / 日本小児精神神経学会 編
- Achenbach, T.M. (1991). Manual for the Child Behavior Checklist and 1991 Profile. Burlington, VT: University of Vermont School of Psychiatry
- Merrell, K.W. (1993). Using behavioral rating scales to assess social skills and antisocial behaviors in school settings: Development of School Social Behavior Scales. *School Psychology Review*, 22, 115-133.
- 注: SSBS の使用は、アメリカの NPO 法人 Committee for Children が、著者 Merrell に対して、世界中でセカンドステップの効果測定の研究に使用する限り、自由に使用してよいとの許諾を得ている。
- Grossman, D.C., Neckerman, H.J. (1997). The effectiveness of a violence prevention curriculum among children in elementary school: A randomized control trial. *Journal of the American Medical Association*, 277, 1605-1611.
- 注: ゲームとおやつ課題は本論文中的「ジレンマ課題」を、日本の学校で適用できるように改編したものである。